

果る、迄よく實行いたしくれ候まゝ何もかもよく相分り候。従つて彼等も心置きなしと相見え代る代る屢々宅を訪問いたし候。此際には私は少しの制裁ぶりたる様を示さず彼等の自由に談話遊戯せしめ居り候がこれによりて學校内の長短處、生徒間の希望不平生徒間の關係さては土地の人情習慣と心得る處實に甚大と考へ候。自慢と申候ものは即ち此事に候。かくて忙しき中にも常に愉快なる日々を迎へて樂しう務め居候。つまらぬ事をくどくど長たらしう申上候。まづは右御返事迄。 かしこ

●春より秋へ

河崎 なつ

花見んと寄り来る人に押されつゝさびしやひとり旅に我立つ

上野を立ちしは四月四日午後零時、其の夜の六時、白川にて粉雪に降られ、翌五日午後一時すぎ、大粒の霰の中を田村丸にて津輕海峽を渡る。大粒の霰しばふる濃き藍の津輕の海をゆく我にふる

まだ知らぬ國の山川描きつゝ、棧橋ゆけば霰の函館にては山皆白く道皆氷りてありき。小樽への汽車の夜ふとさめて小さき窓よりうかがへば渡島の國は雪にねむれり見渡せば林も森も野も山も一白の天地、木なく草なく鳥啼かぬ曉、懸崖によりて測れは雪は四五尺も厚かりき。茅屋時に散在すれ共窓さへ埋れて人の住まんとも覺えず、所々に足跡あれど人影だになし。何程の事もやあると蝦夷の地に來し我ながら雪に泣かれぬ北海道の四月は斯くの如くにして、人は綿入の上に羽織コートを襲ね、シヨール手袋は勿論、カクマキといふ毛布大の厚き毛織物を引き被きて街を行き學校にも來る冬なりき。夜廻りか氷れる街をシャリ／＼杖響かせて歩く淋しさひたふるに涙流れて止まらず海鈍色に粉雪ふる日は

先輩の人に連れられ知らぬ街今日もゆくなり霰ふる街

四月四日

午前六時	最高	最低	風向	風速	天氣	
	八、五	五、七				西南西
東京	六、二	八、五	西南西	三、	快晴	
宇都宮	五、五	九、七	西	四、	快晴	
福島	五、九	六、八	三、七	西	七、	曇
青森	四、二	七、八	—	西南西	九、	曇
函館	一、四	六、二	—	—	—	雨
小樽	一、〇	一、〇	北	強	雪	—

○五月にも入りぬれば、雪に交りて、雨、時雨の如く、突如來りて茸屋根を叩き、又忘れたるか如く晴れ渡る。一雨毎に、野の雪、途の雪は消えてゆくなり。物の音静まりし夕暮、窓の外に堆だかき雪の、シビシビと消えゆくは、寂寥の聲をきくが如し。

痛つよき人にも似たれ北國の雪ふりやがて晴る、大空又しても雨ふる日なりさめさめと狂女か泣ける様に似てふる

されどかたくりの花、雪の下より先づ咲き出でて、此月の上旬より、北海道の春は動く。其の花の美しさ、蘭に似て且つ淡紫なるを、唯々一花廣やかに柔かき葉蔭に匂ひたるは久しき冬籠の人を何よりも慰むるなり。

柔かき葉に抱かれて春くれば山蔭にさくかたくりの花

北國の雪の下よりみいでたるかたくりの花玉かぞぞ思ふいと白き莖のよろしき紫の花のよろしきかたくりの花

○梢の芽三日見ぬまに葉となり花を付くるは、五月の中旬よりにて、櫻さき梅さき水仙雛菊菫花蒲公英冬の花春の花、紅紫こき交せて、所謂百花の爛熳たるはその下旬とす。藤牡丹の艶麗なるは六月に入つてみるべし。霞める山と匂ふ梢とを朝往く途にながめたるは實に駭蕩たる春なれど、夕暮の風胸に染み落日のかげ山原に華やかなるは、秋末の淋しさを免れず。長閑けき春は北海道にみるべからず。

この國は短かき春にあるほどの花を咲かせてはしやげるかな
梅さくらはらはら散りぬ此國は五月の風の梢
ふく時

されど六月の十日頃より、石狩の野にリリーの香る清興あり。廣く柔かき葉かけに橄欖色の心地よきと身に流れ入る高き香とを持てるかの小さき花の風趣は、清楚、幽麗、激艶、清新等の語にては盛り切れず。雲雀の歌も霞む朝、菜の花の咲きつゝく石狩の大野を、吹き渡る風に袂振りつゝ露ながら此の花を抜きゆくは、吉野嵐山の清遊も「何の」と思はるゝは我ひとりにもあらざるべし。

すゝらんの花の白きか心地よくうすらつめたく身にながれ入る
北國の雪か育てし花はよしすゝらんの花かたくりの花

花にもまさりて眺めよきは、細く短かく柔かき緑の葉を持つ落葉松の梢なり。山原に簇生せるは、碧空に緩やかなる山貌を畫き、窓に近き梢

は淡みどりの、カーテンを曳くか如く心地よき落ち付きをみる人の胸に與ふ。山原ゆきて、この梢より華やかなる鶯の聲など聞くは、海よりいづる夏月の如く清鮮の趣たぐひなし。山の下草は皆熊笹なり、風渡ればサヤサヤと、細かき而も澄みたる聲ありて、鶯のこゑに和す。高空を圓く割れり落葉松の山の梢は淡みどりにて
熊笹の山原ゆけば華やかにうすらつめたうくひすのなく
北海道の春はかくして六月に終るなり、六月三十日

地名	氣 温		風	
	最高	最低	風向	風速
大 泊	二二、四	二〇、六	一九、三	霧
上 川	二五、五	二四、四	一一、一	霧
小 樽	一六、五	一九、六	一三、〇	東 曇
青 森	一五、四	二三、一	一四、五	北東 三 曇
山 形	一七、〇	二五、二	一五、〇	一 曇
東 京	一七、八	二六、〇	一七、六	西 二 快晴
新 潟	一八、二	二四、六	一七、一	南 三 雷雨

名古屋	一八、九	二九、八	一八、五	北西	三 快晴
金 澤	一七、二	二五、一	一五、一	西	二 雨
松 本	一五、六	二四、一	一五、三	西	二 曇
大 阪	二〇、〇	二九、八	一九、三	東南東	二 晴
下 關	一八、五	二七、三	一八、八	西	二 晴
高 知	一八、〇	二八、三	一八、七	南南西	三 快晴
熊 本	一九、四	三〇、六	一八、〇	一	一 晴
那 覇	二四、四	二七、九	二三、一	南東	二 曇
澎湖島	二五、四	三一、二	二六、四	南	八 晴
七 川	一八、五	二六、八	一八、七	南南西	二 曇

九月一日渡島後志の山原を越ゆるに、萩女郎花漸くすかれて、秋は半すぎたり。中旬なりけり學校の後の山にのぼれば、漆櫃鹽膚木の色づけるが、早くもほろほろと落葉するに耳を澄ませは、蠡斯の聲も切れ切れなりき。

北の國なが月なれと山の木の梢いろつく悲しからずや
人よ來てかの山原にいたましく瘦せたる秋の後影みよ
こえて廿日あまり復出にのぼりぬ。野菊。蓼。蓬の葉より、イタヤ、白樺、山葡萄の梢など山

の木、野の草、葉といふ葉、悉く淡黄に褐色に赤に深紅に、濃く淡く色づきて、風に散る也。石の布置なく水のごむなきも、山悉く野悉く、落日に燦たる華麗さ絢爛さ壯烈さ雄渾さ、而も夕靄立ち籠むる幽静もあり。ふくとしもなき風にはろほろとこぼるる哀愁もあり。我に靈筆あり、靈彩あるあらは、或は繪き或は叙して、萩のうねりに秋をよろこび、前栽の紅葉に秋色盡せりと眺むる人達に、大自然が眞の色眞の景を傳ふべきにと、今想ふだに蹉跎せらる。中禪寺湖上より男体山の秋貌を仰き、戰場ヶ原の梢の色を記憶し給ふ人々は、更に鮮やかなるものを、山といふ山、野といふ野に見るが北海道の秋と思ひ給は、或はちかかるとし。

山原に虫のなく夜をゆきたまへいのちひたひた流るるを見む
秋晴の夕日のかげの尊さよ大天地の山は皆燃ゆ
華やかに染め出されし山原の白樺の梢を玉かこそ見る

イタヤの木大きく空をかぎりたる秋末の國心地よきかな
 されど十月に入りてよりは、思ひ出したるが如く、はた忘れたるが如く、はらはらと降り、カラリと晴るゝ雨の日いと多く、風また梢を揺りて、その度に山の梢は瘦せゆき秋末の哀れは何にもまして身をそゝるなり。
 此の國の秋のをはりに降りつゝ、くさらさら雨のうすらつめたさ
 岩近く斜に雨の走りゆくそのあはれなる秋の終りよ
 榎屋根に雨の叫く北國の秋の終りのいかに淋しき、
 さやすやと風はゆくなり忍びつゝ風はゆくなり秋末のくに、
 相寄りて涙なかしぬほろほろと風の吹く時梢と梢
 日もすから冷たき雨と十月の風とこもこも我が雨戸うつ
 紙障子はためかしゆく風といふいたづらもの

もあはれなる頃
 我が咽に痛みあてへて十月の風梢ふき雨窓をうつ
 さらさらと雨はふりけり北國の秋の終りのこの十日ほど
 北國の冬は十一月よりとこそきゝるしにあはたしいしかな、神無月二十一日には五寸の初雪をみて、秋は降り續きし雨に、業に己に逝きたるなりけり。「九月より十月に」いかに短かき秋の命ならずや、
 ○はしやぎたる春の華やかさは、寧ろ馬鹿氣たる氣味ありき。リリーと落葉松の梢を除きては、六月の藤花、櫻花散りての梅の花など、何ぞと詩興を惹くものぞ。あるほどの葉、あるほどの梢を、又あるほどの色に染めて、日に輝き、風に散る秋は、大自然かあらゆる偉觀と雄大と盡したる、本道唯一の好季なるべし。顧みれば「春より秋へ」これ僅に六ヶ月なり。花より紅葉にあはただしく移りゆきて、物思ふ（自然に對して）暇もなく、はやくも、今年の冬籠に入る、

灰色の低き空、鉛色の海、謎の如き雪の山は、起臥をする人に、何を語り、何をか思はする、北國の人と、南國の人とは、三歳にして、己に其の想ふ所を異にするなり。
 (完)

十月二十二日

地名	氣 溫		風 向		風 速	天 氣
	最高	最低	風向	風速		
小樽	六〇	二〇	西北	—	—	雪
青森	三、一	一八、四	—	—	—	雨
山形	七、二	二一、六	—	—	—	快晴
東京	九、七	二一、七	—	—	—	快晴
名古屋	七、五	二五、〇	—	—	—	快晴
金澤	一七、一	二一、四	—	—	—	晴
松本	一、一	二〇、二	—	—	—	晴
大阪	一〇、一	二一、九	—	—	—	快晴
下關	一六、二	二二、九	—	—	—	曇
高知	九、八	二五、四	—	—	—	快晴
熊本	八、〇	二五、六	—	—	—	快晴
那覇	一九、六	二七、一	—	—	—	晴
澎湖島	二二、二	二六、一	—	—	—	晴
仁川	一、五	一六、六	—	—	—	快晴

● 稟 告

一、本年度會費未納の方々は、なるべく早く御送附下されたく候。會費御送附は「東京女子高等師範學校内、伊澤光雄」宛になされたく候。なほ、他と混雜の憂なき様必ず、
 「文科學術談話會々費」と御明記置き程願上候。
 一、本誌第五號は明大正二年二月中旬發行の豫定に候間、御寄稿は同年一月末日迄に、東京女子高等師範學校附屬高等女學校内、千葉安良」宛に御送り下され度候。
 (原稿は二十字詰二十行の用紙に御認め下され候はば尤も便宜に候)

大正元年十一月